

2025

2

No. 742

國學院大學学報

「二月十一日」
けふひと日
庭にひびきし斧の音。
しづかになりて
夕いたれり
『倭をぐな』
釈 道空

国学院大学 令和7年2月20日(休) 定期号(毎月20日発行) 1部20円
[発行] 国学院大学 [編集] 総合企画部広報課 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目10-28 [電話] 03(5466)0130 [FAX] 03(5466)0528

祭 儀

■ 月次祭

3月1日(土) 午前10時 仮殿

■ 卒業奉告祭

3月22日(土) 午前10時 仮殿

研究に
者聞く

日本語文法の魅力

古文に秘められた

法則を解き明かす

文学部・小田勝教授

かつて学校の授業で、古典文法を覚えるのに苦しんだという人は少なくないだろう。古典文法は、古典文の読解・解釈に欠かせないものであると思われていても、その魅力については、あまり知られていないのではないだろうか。

古典文法を中心に日本語文法の仕組みを研究する小田勝・文学部日本文学科教授にその魅力を尋ねた。小田教授が熱弁をふるう「日本語文法の面白さ」

4・5面に関連記事

A日程
入学試験

英語外部試験利用型導入

約1万5500人が志願



国学院大学の前期一般選抜入学試験であるA日程入学試験が2月2日から4日までの3日間にわたり実施された。今年度から英語外部試験利用型入学試験制度が新たに導入され、A日程の志願者は約1万5500人と、昨年度より約2000人増加。これによりA日程志願者は4年連続の増加となった。

試験は渋谷・たまプラーザ両キャンパスに加え、全国8都市(札幌、仙台、新潟、長野、静岡、名古屋、大阪、福岡)と青山学院大学青山キャンパスにも会場を設置して実施された。雪こそ降らなかったものの、寒空の下、渋谷・たまプラーザ両キャンパスの試験会場では受験生たちが入り口前の掲示板で受験票を片手に自身の受験教室を確認し、緊張した面持ちでそれぞれの教室に向かう姿が見られた。試験は大きなトラブルもなく終了し、合格発表は14日に行われた。後期一般選抜入学試験であるB日程入学試験は、3月2日に渋谷・たまプラーザ両キャンパスで実施される予定。

高校生向けコンテスト最優秀賞作品を掲載

「全国高校生創作コンテスト」と「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト」の最優秀作品を6・7面に掲載しています。また、両コンテストの作品集を2月下旬に刊行します。両作品集はお一人様各2部まで無料配布いたします。ご希望の場合は、希望部数と送付先を下記までご連絡ください。

作品集は創作コンテストの短篇小説部門は佳作までの作品を、現代詩・短歌・俳句

国高校生新聞社コンテスト事務局
(042・724・2750)

6・7面に関連記事

み
はるかすもの

渋谷ヒカリエ8階に、迫力満点の人形を無料で観覧できる場所がある。今年で生誕100年、世界に名だたる人形美術家・アニメーション作家の仕事に触れることができる「川本喜八郎人形ギャラリー」だ。川本が人形美術を担い、現在も高い人気を誇るNHKの番組、「人形劇 三国志」や「人形歴史スペクタクル 平家物語」の人形が、年2回の展示替えのもと公開されている。特に、めくるめく人間ドラマと無常観が見事に表現されている『平家物語』は、さまざまなウェブ配信サービスで視聴可能だ。人形鑑賞と合わせ、古典の世界も楽しみたい▼人形劇とコマ撮りされる人形アニメーションは、同じ人形を用いても似て非なるものと言える。日本の人形アニメーション黎明期を支えた川本や同志と言える岡本忠成らが切り開いた歴史の先に、近年ヒットを飛ばした『PUI PUI モルカー』も存在する▼川本は国際的な感覚にも秀でていた。チェコのアニメーション作家に感化され、昭和38(1963)年に海を渡り2年間、単身武者修行をした。著書『チェコ手紙&チェコ日記―人形アニメーションへの旅―魂を求めて』(作品社)に触れると、現地の制作者たちと交流する中、「人間に近づけるのではなく、創造するのだ」と、人形アニメーションの「魂」をつかんていく過程が分かる▼渋谷で人形と相まみえ、細部に魅了される時間は、まだ見ぬ未来へ歩を進めた先人からの刺激を受けることになるだろう。

主な内容 2面/人間開発学部 学部長賞表彰式、学生懇談会を実施 3面/令和6年度 補正予算成立 4・5面/古典語と現代語に橋をかける―日本語文法探究の世界
6・7面/珠玉の8作品を紹介 高校生向け2コンテスト

最終面から K:DNA I面/現役医師として人のために何ができるか。その答えを求めて

人間開発学部 学部長賞表彰式、学生懇談会を実施



人間開発学部の理念に基づき、優れた実践活動を行う学生を表彰する「人間開発学部学部長賞」の表彰式が1月15日にたまプラーザキャンパスで行われ、18人の学生が表彰された。

太田直之・人間開発学部長(教授)から受賞者に表彰状と副賞、記念品が手渡され、祝福に集まった同学部の教員より惜しみない拍手が送られた。受賞した学生たちの地域住民へのスポーツ振興活動や地域交流・地域貢献活動、絵本を用いた児童

への教育促進活動など、それぞれの精力的な活動が評価された。

翌16日には受賞者と教職員が学部にて期待することを話し合う「人間開発学部学生懇談会」を開催。太田学部長は「さまざまな場で活躍する学生の意見を反映し、学部運営に生かしたい」と語ると、学生からは学年や学科を超えたつながりの構築や他学部との連携プロジェクト、オンラインオープンキャンパスの実施など多岐にわたる提案が寄せられた。受賞者は以下の通り。(敬称略)

◆初等教育学科▼3年▽厚海帆乃▽蕪木晴▽清水伶華▽立目幹▽南澤彩衣▽山田あかり

◆健康体育学科▼4年▽廣瀬準斗▼3年▽小宮詩歩▽高田勝太郎▽長谷部舞依▽畑瀬優美▽古田椋大▼2年▽岩永凛綺

◆子ども支援学科▼3年▽北島優花▽島田理彩▽玉田楓歌▽中村小春▽山村空



それぞれの活動への取り組みが評価された受賞者ら

観光まちづくり学部「学部長賞」9人を表彰

観光まちづくり学部「学部長賞」の表彰式が1月15日にたまプラーザキャンパスで行われ、9人の学生が表彰された。この賞は、地域における実践的活動や地域貢献活動、課外活動などで優れた実績を上げた学生に対して、その業績をたたえることを目的に本年度より創設。

西村幸夫・観光まちづくり学部長(教授)が開会のあいさつをした後、西村学部長から受賞者一人一人に表彰状と副賞が手渡された。受賞者は「今回の活動で培ったフィールド調査の経験や今後の研究でも生かしていきたい」「感謝の気持ちを忘れず、『地域を見つめ、地域を動かす』という学部の理念を胸に今後も精進していきたい」とそれぞれの活動内容の紹介やそこで得た学び、今後の抱負などを語り、様子を見守った同学部の教員から温かい拍手が送られた。受賞者は次の通り。(敬称略)

◆観光まちづくり学科▼3年▽石川至恩▽石峯あやか▽小村恋晴▽榊原悠太▽笹井美杏▽辻響輝▽原桜子▼2年▽酒井麻那▽古川楽人

大学院委員長特別賞 4人を表彰



大学院委員長特別賞の表彰式が1月15日、渋谷キャンパスで行われた。受賞者は佐藤長門・大学院委員長(文学部教授)らから表彰状と副賞を受け取った。同賞は大学院学生の学修意欲の向上を目的とし、優秀な学業成績を収めた学生の業績をたたえ、誇りをもって研究活動を継続できるように表彰を行う制度として創設された。

受賞者は以下の通り。(敬称略)

▽高夢雨(博後文3)▽布川寛大(博後文2)▽吉永優真(博後文1)▽倉林直紀(博後法1)

国際交流送別会 交換留学生4人が修了



国際交流送別会が1月22日に渋谷キャンパスで開催され、在学生や教職員たちが留学期間を終える大学院交換留学生2人、K-STEP交換留学生2人を送別した。

初めに交換留学生たちが留学期間を振り返り、別れを惜しみつつ日本語でスピーチを行った。続いて田原裕子・国際交流推進部長(経済学部教授)が交換留学生一人一人に修了証を手渡すと、会場から大きな拍手が送られた。

最後に、田原部長から「皆さんはこれから自分の大学にもどって勉強を続けていくが、国学院大学で学んだことをこれからの勉強に生かしてほしい」と留学生たちへメッセージが送られた。

佐々木健策氏に博士の学位授与

国学院大学は佐々木健策氏(小田原市職員=写真)に博士(歴史学)の学位を授与することを決定した。2月5日、渋谷キャンパスで針本正行学長から学位記が贈られた。

佐々木氏の学位論文は「戦国期小田原の城と城下町 遺跡と景観にみる戦国大名」。主査は吉田敏弘文学部教授、副査は矢部健太郎文学部教授、川名禎文学部准教授、鈴木康之県立広島大学教授。



◆学内合同企業説明会

令和7年度卒業予定者を対象とした学内合同企業説明会(以下、説明会)が1月30日にオンラインで、2月6、7日は渋谷キャンパスで対面開催され、延べ2900人ほどの学生が参加した。本学学生への採用意欲の高い企業が計100社参加した。

各企業の説明会で、就職活動に臨む学生は熱心にメモを取りながら、採用担当者による企業概要や選考方法の説明に耳を傾けた。写真

就職活動が本格化 説明会・アドバイス会を開催



企業概要や選考方法の説明に耳を傾けた。写真上。

説明会は、低年次からのキャリア形成を目的に、今年度から一部日程で2年生の参加も可能としている。このほか、2月13日にはたまプラーザキャンパスでも説明会が行われた。

今後、オンラインでの説明会を2月26、27日に実施の予定。

●OB・OG・内定者アドバイス会

就職活動を控えた学生に向けて、企業や官公庁、自治体などで活躍する院友(卒業生)らがアドバイスをするOB・OG・内定者アドバイス会が2月8日、渋谷キャンパスで開催され、延べ1200人を超える学生が参加した。

当日は、全国各地から約70人の院友「同下」が来校し、さらに大手企業や官公庁などの内定者(4年生)約10人もアドバイスをを行った。

参加学生は、先輩たちの仕事内容や就職活動の体験談、選考に臨む上でのポイントなどを尋ねるなど、積極的に自身の進路や就職活動の参考にしようとしていた。

インフォダイジェスト

大学からのお知らせ

国学院大学生協への出資金返還

生協加入時にお預かりした出資金の返還手続きを開始します。令和6年度の手続き詳細は生協HP(<https://www.kgucoop.or.jp/henkan2.html>)をご覧ください。今年度よりWEBフォーム(二次元コード)より申し込み後、銀行振り込みでの返還になります。返還期限は令和9(2027)年2月末です。期限内に返還手続きをされない場合は時効となり、出資金の返還ができなくなりますので期限内での手続きをお願いいたします。

日3月3日(月)~

対令和6年度卒業生

問生協事務所(☎03・5466・0165)



博物館



料無料 時10~18時(最終入館17時30分)。
祝日を除く月曜休館
※博物館関連イベントの問い合わせは☎03・5466・0359

企画展「江戸の本屋さん - 板元と庶民文学の隆盛 -」

出版文化の広がりに伴う庶民読者の増加が顕著に見られるようになった江戸中期以降、彼らの嗜好と期待に応える戯作類が、急激な勢いで出版されていきました。こうした戯作群の製作、出版、販売を担っていたのが、本屋さんです。板元とも呼ばれた本屋は、江戸府内に次第に増えていき、戯作者らの執筆活動を後押し、プロデュースしていくことになります。本展示では、その江戸の本屋の活動を概観するとともに、本学図書館所蔵の甘露堂文庫(伊藤孝一旧蔵)と小柴文庫(小柴値一旧蔵)という江戸戯作コレクション蔵本を中心にして江戸時代後期の、華やかで遊び心にあふれた版本・錦絵の数々をご紹介します。

日2月22日(土)~4月20日(日)

場博物館企画展示室

本紙へのご感想をお待ちしています

『國學院大學学報』では、読者の皆さまからのご意見・ご感想を募集しています。今後の紙面作りの参考にさせていただきますので、以下(二次元コード)のフォームから、ぜひご協力をお願いいたします。昨年度のアンケート結果は、学報バックナンバーページ(<https://www.kokugakuin.ac.jp/about/efforts/p20>)でご確認ください。



問広報課(☎03・5466・0130)

資金収支補正予算書

令和6年4月1日から令和7年3月31日まで

(単位：百万円)

収入の部			
科 目	補正予算	予算	増減
学生生徒等納付金収入	14,769	14,953	△184
手数料収入	767	728	39
寄付金収入	273	389	△116
補助金収入	3,254	2,749	505
資産売却収入	0	0	0
付随事業・収益事業収入	243	213	30
受取利息・配当金収入	179	178	1
雑収入	385	312	73
借入金等収入	501	501	0
前受金収入	2,702	2,717	△15
その他の収入	1,765	1,678	87
資金収入調整勘定	△3,128	△3,112	△16
当年度収入合計	21,710	21,306	404
前年度繰越支払資金	9,643	8,128	1,515
収入の部合計	31,353	29,434	1,919

支出の部			
科 目	補正予算	予算	増減
人件費支出	10,524	10,427	97
教育研究経費支出	5,045	4,676	369
管理経費支出	1,432	1,344	88
借入金等利息支出	7	7	0
借入金等返済支出	643	546	97
施設関係支出	1,240	1,336	△96
設備関係支出	484	419	65
資産運用支出	3,932	2,416	1,516
その他の支出	582	318	264
予備費	269	294	△25
資金支出調整勘定	△464	△319	△145
当年度支出合計	23,694	21,464	2,230
翌年度繰越支払資金	7,659	7,970	△311
支出の部合計	31,353	29,434	1,919

事業活動収支補正予算書

令和6年4月1日から令和7年3月31日まで

(単位：百万円)

		科 目	補正予算	予算	増減
教育活動収支	事業活動収入の部	学生生徒等納付金	14,769	14,953	△184
		手数料	767	728	39
		寄付金	270	355	△85
		経常費等補助金	3,219	2,719	500
		付随事業収入	193	163	30
		雑収入	385	312	73
		教育活動収入計	19,603	19,230	373
	事業活動支出の部	人件費	10,521	10,535	△14
		教育研究経費	6,839	6,410	429
		管理経費	1,542	1,454	88
教育活動支出計		18,902	18,399	503	
教育活動収支差額		701	831	△130	
教育活動外収支	事業活動収入の部	受取利息・配当金	179	178	1
		その他の教育活動外収入	50	50	0
		教育活動外収入計	229	228	1
	事業活動支出の部	借入金等利息	7	7	0
		その他の教育活動外支出	0	0	0
		教育活動外支出計	7	7	0
教育活動外収支差額		222	221	1	
経常収支差額		923	1,052	△129	

		科 目	補正予算	予算	増減
特別収支	事業活動収入の部	資産売却差額	0	0	0
		雑収入	0	0	0
		その他の特別収入	50	75	△25
		特別収入計	50	75	△25
	事業活動支出の部	資産処分差額	0	0	0
		その他の特別支出	0	0	0
		特別支出計	0	0	0
特別収支差額		50	75	△25	
【予備費】		269	294	△25	
基本金組入前当年度収支差額		704	833	△129	
基本金組入額合計		*△1,835	△1,866	31	
当年度収支差額		△1,131	△1,033	△98	
前年度繰越収支差額		△9,755	△10,810		
基本金取崩額		0	0		
翌年度繰越収支差額		△10,886	△11,843		
(参考)					
事業活動収入計		19,883	19,533	350	
事業活動支出計		19,179	18,700	479	

※■第1号基本金…17億3500万円
教育の質向上のために取得した固定資産の価格
■第2号基本金…1億円
教育の質向上のために将来取得する固定資産取得に充てるもの

令和6年度

補正予算成立

令和6年度学校法人国学院大学補正予算は、1月30日の理事会・評議員会で承認、成立した。

資金収支予算は、会計年度中の全ての収入および支出の内容と支払資金の顛末を明らかにすることを目的としている。

◇資金収支補正予算

令和6年度補正予算総額は313億5300万円で、当初予算額対比19億1900万円の増額となった。収入面では国学院高等学校、国学院大学久我山中学高等学校で、東京都授業料軽減補助成金が拡大したことにより、学費等納付金の減収を見込む一方、補助金収入が増収となっているほか、支出面では大学部門にお

いて新たに教学IR推進経費（約1000万円）等を計上している。事業活動収支補正予算

事業活動収支の内容は、当該年度の①教育活動②教育活動以外の経常的な活動③前記以外の活動―以上三つの活動に対応する事業活動収入および事業活動支出の内容を明らかにし、区分経理を行い収支の均衡状態を明らかにすることを主な目的としている。

本補正予算においては、令和6年度収支差額は法人全体で7億400万円の収入超過となる見込みである。この結果、翌年度に繰り越される支出超過額は108億8600万円となる予定。なお、支出超過の主な要因は基本金組入額18億3500万円の計上である。詳細は、学校法人国学院大学HPに掲載している。（財務部経理課）

学問ノ道

第66回

『國學院雜誌』の回顧と展望

―石川・河野・折口の時代から

明治27（1894）年11月に刊行された『國學院雜誌』は130年を経て今年はい25巻、1400号を超えた。その誌面は時代ごとに刷新され、新たな研究を発信し続けている。内容だけでなく、雑誌の構成も表紙デザインも、明治・大正・昭和・平成と時代に応じて更新されてきた。このような長きにわたり刊行が続けられてきたのも、寄稿を掲載するにあたり編集を担当する人々がいたからである。

を「自分にとつて最も親みの深い本誌」と評しており、実際に編集を担当した人物たちの名を挙げつつ、特集号にまつわる苦慮や、当時の思想界に処する対策などがあったことを記している。そして、『國學院雑誌』を「常に其の本領を失はないやうに、而して充実した力を以て其の本領を発揮するやうに切望するものである」と展望したのであった。

大正13（1924）年11月の『國學院雑誌』（第30巻第1号）では、刊行から三十巻に達したことを機に「國學院雑誌編輯回顧録」という特集が組まれ、編集の任に当たった、堀江月明（秀雄）・石川岩吉・河野省三が文章を寄せている。この段階で回顧記事が組まれるということは、当時において一定の社会的役割を『國學院雑誌』が果たしていたことを示しているよう。明治42（1909）年から大正4（1915）年までの担当だった石川は、当時1500部前後の印刷費の負担から、財政難に陥ったことを回顧する。それによる『國學院雑誌』廃刊の意見があったこと、財政難を抜け出した後に他雑誌と合併意見もあったことなどを回想している。また大正7年から9年の担当であった河野は『國學院雑誌』

国学院研究の第一人者である河野が編集から退くとき、折口信夫は、「異訳国学ひとり案内―河野省三足下にさゝぐー」を『國學院雑誌』（第26巻第10号・第12号 大正9年10月・12月）に寄稿した。この論考で折口は、これまでの国学院研究を批判している。そして、このとき折口には、自分が思う国学院・文学観に基づいた雑誌にしていこうとする思いがあったようである。同年、折口は小林謹一宛ての書簡に「都合によると、学校の雑誌を、友人らとやることになるかも知れません。さうすれば、すこし、読みごたへのあるものに改めたい、と考へて居ます」（11月3日）、「國學院雑誌は、お察しの通り、一月からいよいよ、私どもですることになりました。わからずやどもと喧嘩する迄は、やって見よう、と思ひます」（11月22日）と書いている。折口は『國學院雑誌』刷新の意欲を強めていたのである。

このように『國學院雑誌』は、時代ごとに携わった人々の支えによって、今日まで続いている。雑誌の歴史は本学の歴史、または人文学史ともいえるよう。本学の研究の顔である『國學院雑誌』は、これからも充実した研究と読み応えのある特集を発信し続けるであろう。

研究開発推進機構
准教授 渡邊卓

各時代の「國學院雑誌」



文法の鍵は暗記ではなく「仕組み」

専門にしているのは日本語文法、その中でも特に古典文法なのですが……何よりまず、具体的にどんな面白さがあるのかを、例題的なものを通して話してみよう。学校の授業で文法アレルギーになったという方もいるかもしれませんが、文法の面白さはルールを暗記することにあるのではなく、そんな面白い世界はないと確信しています。笑。ぜひ少し、覗いてみてください。

①部屋（一）机がある。

②部屋（一）試験がある。

日本語を母語とする方であれば、①は「に」、②は「で」とお答えになったのではないのでしょうか。では、なぜ①は「に」、②は「で」を使うのか、その仕組みを自身で説明できるかどうか、しばし考えてみてください。……いかがでしょうか。普段まったく意識せずに使っている文法の仕組みを、いざ明確に説明せよと言われると、なかなか簡単にはいきなり出てきません。不思議なもので、私たちは日本語文法に関する答えは知っているのに、仕組みを知らないのです。そしてここに、文法のルールを自分で考えて発見することの面白さがあります。

今回は話を進めるために、その仕組みをお伝えしてしましますが、①②からは、物が存在するときは「に」、出来事が存在するときは「で」を使う、という仕組みを導き出すことができます。ではここで、古典文法のことを考えてみましょう。万葉集の最初に登場する歌に、左記のような一節があります。

この岡に菜摘ます児
この岡で菜を摘んでいらっし

研究に 者聞

古典語と現代語に 橋をかける

—日本語文法探究の世界

文学部・小田勝教授

古文のカタチから読み解く新解釈の余地

今の古典の読解・解釈において、古典文法の仕組みの正確な理解・反映がなされていないところがあるのではないかと、いうことを申し上げました。ここでは「源氏物語」から、具体的な一節を紹介しつつ、ご説明したいと思います。

の素性を隠すわけですね。右大弁が自分の息子のようにして光源氏のことを紹介しながら、光人に見てもらった……という場面での、相人に関する一節が、私たちに与える問題となります。

相人おどろきて、あまたば傾きあやし。

この文は、普通「相人は驚いて、何度も首を傾けて不思議がる」と現代語訳されています。それで良いのですけれども、ここで、古典文のカタチを見てくださ。「傾き」と自動詞になっている。実はこういう場

「桐壺」の巻における高麗の相人「占い師」の観相といえは、授業で習ったという方も多いかもしれません。高麗人の優れた相人（占い師）が日本にやって来たというので、帝が息子である光源氏の相を見てもらおうとする。しかし占い師の側に先入観が働くといけないので、光源氏

ある文庫本は、この下の句を「私も男女の仲にかすらわつていたずらに物思ひをしていた間に」と訳していますが「世にふるながめ」という連体修飾が、どうしてそういうカタチで解釈されるのでしょうか。私は、これを「内容を表す連体修飾語」として「私がこの世をどう過ごしてゆくかという物思ひをしていた間に」と解釈しています



「小田勝『百人一首で文法談義』（2021年、和泉書院）」が、いかがでしょうか。こうした例は、いろいろあるようです。

「非文」から見える日本語文法の奥深さ

普段の作業としては「このようにしか使えない」という文法の仕組みを、ひたすら調べて見つけていくというのを繰り返して行くわけです。そのときの作業の一つとして「非文」、つまりは文法的に成立しない文をわざと作りだして検討する、ということも行います。例えば、「部屋に試験がある」というような非文を作ってみる。一つだけ作ったからといって、すぐ文法の仕組みを見つげ出すことはできません。いろいろな非文を作ってみて、こうした仕組みをみながら頭をひねりながら見つけていくものであるという点に、面白さを感じています。研究史上、未だきちんと示されていない

い文法の仕組みについて上手に説明を考え出すことができれば、論文が一本書けるということになります。

ほんのさわりではあります。少し味わっていただけましたでしょうか。

私がこれまで著したもののの中に、「実例詳解 古典文法総覧」（2015年、和泉書院）という大部の書籍があります。現在この「古典文法総覧」の「補遺稿」を版元のウェブサイトで連載しており、それらを加えた新版を準備中なのですが、いずれにしても本書の特徴は、従来の古典文法解説における項目立てを見直し、現代日本語文法書や英文法書で用いられている文法記述の枠組みと接続することで、そのため紙面も横書きに



おだ・まさる
博士（文学）。専門は日本語学、古典文法。主な著書に、『源氏物語全解説 第一巻 桐壺・帯木・空蟬・夕顔』（2024年、和泉書院）、『百人一首で文法談義』（2021年、和泉書院）など。

現代語文法が古典語を読み解く鍵となる

もう一つ、重要なこととして申し上げたいのは、ここまで述べてきたような疑問が頭に思い浮かぶためには、古典文法の知識だけではなくて、現代日本語文法についても広く知らなければならぬ、ということです。例えば、下記のような古典文を目にしたとします。

「雉ある」と求めに来た人に、虚言を「あり、取りにおこせよ」と言へば兼澄集・詞書

「雉はあるか」と求めに来た人に對して、もつていないのに「ある」と嘘をついたというのです。ひどいですね（笑）。ただ、この古典文は、簡単に意味が分かるので、何の不思議も感じないまま読んでしまうのではないのでしょうか。しかし、この古典

文は、現代語には存在しない非常に面白い形なのです。私がこのことに気付くことができたのは、江口正「日本語の引用節の分布上の特性について」（1992年、「九大言語学研究室報告」13）という現代日本語文法に関する研究論文を読んでいたためです。そこでは、現代日本語の引用構文に、

○「あるよ」と嘘を言う。
×嘘を「あるよ」と言う。

という語順の制約があることが指摘されています。こうした知見を知っていたからこそ、「古典語にはこの語順制約がなかった」ということに気付くことができたのです。

日本語文法を広く見渡し、細部にわたって見つめることを、

ひたすら重ねていくしかないのではないのでしょうか。目下、私を取り組んでいるのは、「源氏物語全解説」（和泉書院）という、全15巻予定のシリーズです。令和6（2024）年3月に第一巻、12月に第二巻が出たばかりですから、まだ先は長い。「源氏物語」をきちんと文法的に読む、ということ徹底してみたいと思っています。そして、同じ版元から平成27（2015）年に刊行した『実例詳解 古典文法総覧』に関しても、着々と手を加えています。その後の新たな発見などを版元ウェブサイトと連載として書き連ねており、それらを合わせた新版を刊行する予定です。日本語文法の面白さを、より多くの方へと伝えられればと考えている次第です。

珠玉の8作品を紹介

高校生向け 2コンテスト

国学院大学とスクールパートナーズ（高校生新聞社）による第28回全国高校生創作コンテスト（協賛：国学院大学若木育成会・国学院大学友会・国学院大学北海道短期大学部、後援：文部科学省・全国高等学校長会・全国高等学校国語教育研究会・全国進路指導協会）と、第20回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト（協賛：国学院大学若木育成会・国学院大学友会・国学院大学北海道短期大学部、後援：文部科学省・全国高等学校長会・日本進路指導協会の両コンテストには合わせて1万5862点、創作1万528点、伝承文化134点の応募があり、本紙令和6年12月号で既報の通りに各部門の入賞作品が決まった。今号では両コンテストでキラリと輝いた各部門の最優秀賞作品8点を紹介する。

両コンテストの受賞作品一覧は
大学HPでご覧いただけます

第28回 全国高校生創作コンテスト

短篇小説の部 最優秀賞

あるく桜前線

黒須さくらさん（東京・三鷹中等教育学校3年）
調子が、がたいが良く声も洪く。先生が歩くとき道ゆく花が綻ぶ。先生が歌うときつばみが芽吹く。あと園が花でできている。どうして「そこ」なのかは、遠慮して聞くことができない。少なくとも先生は、とりあえずはちゃんと生物教師をしている。おっとりした口

第20回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト

折口信天賞・地域文化研究部門（個人）最優秀賞

千葉県大網白里市山辺地区における講の現状

戸田武瑞さん（千葉・長生高2年）
自分が住む地域の路傍に「諸畜犬・」と書かれた卒塔婆が立っていることに気がつき疑問に思い調べたところ、父が養った犬が「大い」が分かった。現在も講が活動していること、その現状に興味を持った中で、学校の先生から本コンテストの紹介があり、応募に至った。村

地域文化研究部門（団体）最優秀賞

世界が認めた生きる遺産

傾斜での農業を可能にした農具

徳島県にし阿波地域は過疎化・高齢化が進む一方、2018年に世界農業遺産。今年、日本ジオパークに認定され、国内外から注目を集めている。その中で、人々が自然とともに育んだ文化や歴史、生活の中で生み出した知恵に着目し、傾斜地農業で使われてきた農具を研究してきた。また、農具調査で見た歴史や生活の営みを次世代に残したいと考え、応募に至った。世界農業遺産に認定されたにし阿波地域は二つの市と二

地域民話研究部門（個人）最優秀賞

駿河国富士郡入山瀬村の旧字の考察

旧字からみた入山瀬村―渡邊正太郎さん（静岡・富士高2年）

私は中学時代より趣味として郷土研究を続けてきた。現在ももっぱら地元の研究に研究しているが、先日知り合いの方から小地名が記載された入山瀬村の村絵図にいたこと、村絵図に記載された小地名などについて研究をしてみることとした。そこで、研究成果を昨年応募したこのコンテストに応募した次第だ。そもそも研究の対象とした「旧字」は、柳田国男氏による

地域民話研究部門（団体）最優秀賞

松山平野南部の伝承調査

河童・大森彦七・落武者の里の謎を解く―愛媛・松山北高 郷土研究部

これまで松山市小野谷地区を中心に地区の方々の協力を得ながら、現地調査を実施し研究を進めてきたが、伝承の調査地域を松山平野南部の、砥部町・松前町・東温市にまで広げ、民衆の信仰や戦乱の様子について調査し、地域での聞き取り調査や、文献をもとに、地域の伝承に含まれる

つばみをつけ、あつという間

に開花してしまつた。僕たちは好奇心を抑え、バカ真面目に歌っている新担任をちらりと盗み見た。どうしてそんなに不思議なことが起こるのだろうか、と時代錯誤な騒ぎ方を僕たちはしない。そんな僕も気になるので加堂先生をまた横目に追っ。ただでさえ大きい口をさらに開けて歌っているで、口のの中の「花」が

がかなんか見える。ピンクや黄色や淡い紫のカラフルな口内に僕たちは安堵した。悪いくはなさそう。それからというものの、やたら形も色も良い花があちこちの花壇で散見され、窓から風が吹き込むと必ず何かしらの花びらが届くようになった。十中八九担任の不思議な性質によるのだが、特に害もないので皆陽気に過ごしていた。ある時女子がそれとなく「教室のチェアリッパも可愛いだね」、新しいお花も見たいですね」なんて言った時、厳つい体育教師もどきき

とぼんやり笑った。さすが先生は皆の前でマジックショなどしなないだろうと高を括っていたのを、不思議な芳香が僕たちを掠めた。不思議なところか白衣のマジシャンは、どこからともなくユリの切り花を取り出し、さくさく花瓶に生けてしまったのである。以来

本研究の調査対象地である大網白里市山辺地区は千葉県中部に位置し、谷津などの里山の景観が残る一方で、近年では大規模な宅地造成や集落の過疎化、少子高齢化が進み、地区内の環境は変化している。このよう山辺地区における講の文献資料は乏しく、その詳細や現状について文献資料からうかがうことはできなかった。そのため、現地を訪れ聞き取り調査を行った。聞き取り調査では各集落を訪れて屋外で出会った住民の方に詳細な話を伺うために、お寺の住職の方や元区長の方など地元的事情に詳しい方に連絡を取った。酷暑の中での

れ異なっている。私たちは標高差400mに及ぶ二つの集落で合計21軒の農家が保有する全ての農具の長さ・重さ・呼び方、使い方の煙の傾斜角、サラエの柄など調査した。また、栽培している作物や農具の修理歴などを聞き取った。これらのデータを基に、次の二つの仮説について検証・考察を行った。①煙の傾斜角とサラエの柄角に相関関係はあるのか。②標高差による農具の種類や使い方に違いはあるのか。仮説①については、相関関係は認められなかったが、煙の傾斜角が一樣でなかった。この煙にはこのサラエを使っている、といった細かなデータをまとめることで、何らかの関係が見出せる可能性がある

入山瀬村（現静岡県富士市）「富士山南麓のく一般的な農具だ。入山瀬村の旧字は地組改正に加えて明治時代の地組改正の進出によって大幅に整理され、特に製紙工場が進出した南部においてはその痕跡を発見することが難しくなっている。研究の契機となった村絵図には、位置とともに地名も細かく記載されているため、特に南部の字を復元するにあたって大きな手掛かりとなった。入山瀬村の字について、その先行研究はほとんど見られなかったため、まずは入山瀬村に伝わっている民話や村の沿革を調査した。入山瀬村の民話の収集は市立図書館に所蔵されている郷土資料を利用し、村の沿革につ

僕たちは先生の特質との距離感を掴みかねていた。

加堂先生の「花」のこと、僕たちはどこまで聞いていいんだろう？ クラスメイトは「直接的な発言は控えるが、先生と花の話を楽しむ人」と、彼の地雷を踏まないように、普通の人間として接する人」に二分した。前者にはコミュニケーション能力の高い男子が、女子が多い。僕は後者。とりわけ植物に興味もないし、水やりなんて奇妙なこともあまりしたくない。ところが学級委員の肩書きを背負った僕を、加堂先生はたいそう信頼しているらしい。俺ね、パンケーキ、食べてみたいのよ

ある時白衣の体育教師はそう告白した。パンケーキというジョイスにも驚いたが、僕は「食べてみたい」の方に、僕を取られてしまった。この「食べべ」ことができるのか。というものの、あの「園」でどうやらで咀嚼するのさっぱり見当がつかないのである。そもそも加堂先生が何か食べているところを見たことがなかった。水は飲むようだ。僕たちは腹を満ちた。光合

結果として、山辺地区では民間信仰で結ばれた5種類の講口安御や十三夜講（三夜講）題目講や甲子講（三峯講）の計20団体が現在も活動していることが明らかとなった。しかしそれらの講は既に民間信仰として結ばれた本来の目的は失われ、住民同士の歓楽や飲食の場として存続している。中には高齢者福祉事業で組織された高齢者団体に再編され

ると考えた。仮説②については、標高差による大きな違いよりも、各農家間での呼び方や使い方の違いが顕著だった。例えば「一見サラエではない農具が「サラエ」と呼ばれていたたり、煙の石が年々小さくなるに連れて土上りにサラエではなくフロを使うようになったという農家も見られた。各農家による違いは、現在農具を使用している農家が、親や祖父母から畑仕事を教わってきたり、農具の呼び方や使い方に変化してきたこと起因しているのではないかと、地質や環境の変化に合わせた、人々が工夫を凝らしながら農具を活用してきたとも考えられる。農具を通じて人々の知恵が生まれ、それが受け

いての調査では入山瀬村や近辺の村々の旧家の文書などを主に利用した。次に、村絵図に記載された旧字を、民話や沿革の調査をもとに「民話由来」「寺院由来」といった具合に大まかに由来を推測、分類して全体的な特徴をつかんだ。入山瀬村の字の特徴として、第一に入山瀬村の字は地形など環境に由来するものや寺院に由来するものが大部分を占めていること、第二に民話に由来する字が特定の地域に集中していること、第三に寺院に由来する字が入山瀬村南部に集中していることが明らかになった。その後は旧字を個々に研究し、民話や沿革などの調査と

精査した結果、楠木正成を切腹に追い込んだのは高師家の家臣であったと結論づけ、なぜ、太平記の作者が、大森彦七の物語を創り上げたのかについて推論してきた。松山平野南部部の山間にある東温市滑川地区には落武者伝承が数多く伝わっている。その要因として、一つ目は、滑川川流の独特の地形が落武者の隠れ里として適していたこと。二つ目は、滑川地区の人々は、山の民として行商して生計を立てており、他村に入る場合の家出緒として平家

して違まわしに聞けないものかと悩んで口を開いた。

「甘いもの、お好きなんですか」 「そもそも噛めるかわからないだけだねえ」 突然の核心をついた返答に、どきりとしつつも安心し、そしてまた焦った。噛めるかわからないなら蜜食は好まようとするのか。花の蜜は好き、と先生はふんわり笑っていられた。ここで質問を重ねると失礼かもしれないと思い、さりげなく話をそらした。 「うーん、先生は例の大きな口をあぐり開けて僕に見せられた。無理やり歯医者の跡取りにされたみたいない気持ちになった。」

「奥歯からね、カーネーションでしょ。バラ、アネモネ、ストック、フリジア、スイトピー、ペゴニア、シクラメンだよ」 歯にしては本数が少ないなと気づいた。花が大きいのであろう。小ぶりな咲き具合とはいえず、真っ赤なバラは僕の歯の三分くらいあった。下の歯の歯根を揃えた色違いになっており、咬合は問題ないと思えた。 「三島くん、歯医者さんみたいだねえ」 そういつて患者が笑い、やつと大きな口を閉じたので、僕は診察を終了した。

た講も見られた。また、集落の過疎化により講の高齢化が進み、講行事が縮小・廃止される傾向が強いこと、特に講の中心層が70代であり、親から子への世代間継承がされていないこと、かなり近い将来に多くの講が消滅すると思われる。このような講の縮小・消滅を避けることが難しい現状において、今このうちに講の活動を記録するものが急務である。加えて講で用いた道具なども記録し保存環境を整備することが必要である。今後の課題として、現状が不明瞭である他地域の調査を進め、現代の農村社会における講の在り方について調査していきたい。

継がれていく過程を垣間見ることができた。農具と人との関係性を深く探るためには聞き取り調査の質問内容をブラッシュアップする必要がある。また農具の使用者について年齢や性別、体格などに注目し、使用時の様子を撮影して物理的視点から考察すること、傾斜地の生活や日々受け継がれてきた知恵を掘り下げていきたい。少子高齢化により、傾斜地で生活する人々は減少している。しかしこの変化を記録することは農具だけでなく傾斜地農耕システム全体の保全にもつながるのではないかと。受け継がれた知恵こそこの研究で明らかにし、後世に伝えたい。

照らし合わせ、追加の調査などを行い、各旧字の由来や具体的な位置を推測、推定してきた。研究の成果には、旧字や村内の小集落を多角的な視点から捉えられたことで、江戸期の入山瀬村の生活の一片が見られたこと、また入山瀬村の歴史や民話に関する新たな発見があったことが挙げられる。そして、調査の一環で地元市立博物館に入山瀬村に隣接する村々の村絵図を含む文書群が所蔵されていることが明らかになったが、いまだこの研究は手を付けられていない。今後はそれらの史料をもとに、入山瀬村の旧字とその近辺の村々の小地名との関係性などを研究していきたい。

の落武者伝承を必要としたこと。三つ目は、他村から流入してきた人々が、滑川地区住民の持つ平家の家出緒に対抗するため、平家以外の落武者伝承をつくりあげていったこと。四つ目は、修験者の「拝み屋」が、折橋の際に村人が知っているであろう歴史上の有名人名を祀るよう告げたこと。以上の4点が滑川地区に数多くの落武者伝承が伝わっている理由であると結論づけた。今回は文献資料に頼りすぎ、現地調査が希薄になった

「食べたらお花、傷つきませんか」

すると加堂先生は一瞬言葉詰まりした。 「甘いもの、お好きなんですか」 「そもそも噛めるかわからないだけだねえ」 突然の核心をついた返答に、どきりとしつつも安心し、そしてまた焦った。噛めるかわからないなら蜜食は好まようとするのか。花の蜜は好き、と先生はふんわり笑っていられた。ここで質問を重ねると失礼かもしれないと思い、さりげなく話をそらした。 「うーん、先生は例の大きな口をあぐり開けて僕に見せられた。無理やり歯医者の跡取りにされたみたいない気持ちになった。」

「奥歯からね、カーネーションでしょ。バラ、アネモネ、ストック、フリジア、スイトピー、ペゴニア、シクラメンだよ」 歯にしては本数が少ないなと気づいた。花が大きいのであろう。小ぶりな咲き具合とはいえず、真っ赤なバラは僕の歯の三分くらいあった。下の歯の歯根を揃えた色違いになっており、咬合は問題ないと思えた。 「三島くん、歯医者さんみたいだねえ」 そういつて患者が笑い、やつと大きな口を閉じたので、僕は診察を終了した。

た講も見られた。また、集落の過疎化により講の高齢化が進み、講行事が縮小・廃止される傾向が強いこと、特に講の中心層が70代であり、親から子への世代間継承がされていないこと、かなり近い将来に多くの講が消滅すると思われる。このような講の縮小・消滅を避けることが難しい現状において、今このうちに講の活動を記録するものが急務である。加えて講で用いた道具なども記録し保存環境を整備することが必要である。今後の課題として、現状が不明瞭である他地域の調査を進め、現代の農村社会における講の在り方について調査していきたい。

継がれていく過程を垣間見ることができた。農具と人との関係性を深く探るためには聞き取り調査の質問内容をブラッシュアップする必要がある。また農具の使用者について年齢や性別、体格などに注目し、使用時の様子を撮影して物理的視点から考察すること、傾斜地の生活や日々受け継がれてきた知恵を掘り下げていきたい。少子高齢化により、傾斜地で生活する人々は減少している。しかしこの変化を記録することは農具だけでなく傾斜地農耕システム全体の保全にもつながるのではないかと。受け継がれた知恵こそこの研究で明らかにし、後世に伝えたい。

照らし合わせ、追加の調査などを行い、各旧字の由来や具体的な位置を推測、推定してきた。研究の成果には、旧字や村内の小集落を多角的な視点から捉えられたことで、江戸期の入山瀬村の生活の一片が見られたこと、また入山瀬村の歴史や民話に関する新たな発見があったことが挙げられる。そして、調査の一環で地元市立博物館に入山瀬村に隣接する村々の村絵図を含む文書群が所蔵されていることが明らかになったが、いまだこの研究は手を付けられていない。今後はそれらの史料をもとに、入山瀬村の旧字とその近辺の村々の小地名との関係性などを研究していきたい。

の落武者伝承を必要としたこと。三つ目は、他村から流入してきた人々が、滑川地区住民の持つ平家の家出緒に対抗するため、平家以外の落武者伝承をつくりあげていったこと。四つ目は、修験者の「拝み屋」が、折橋の際に村人が知っているであろう歴史上の有名人名を祀るよう告げたこと。以上の4点が滑川地区に数多くの落武者伝承が伝わっている理由であると結論づけた。今回は文献資料に頼りすぎ、現地調査が希薄になった

か共食いのような気がしてならず、そわそわしているとき、先生がこちらに視線を寄せた。僕は弁明する。 「僕は弁明する。花食べて大丈夫かなって」

先生は、食えますよ、とききとんとした。 「人魚だって魚を食べるでしょう」 そう言って目の前の担任は、まっすぐ僕を射抜いた。予想外の鋭さに、いや、まあ、そんなんですけど、と僕は言葉を出す。 「きみはそうやって気を遣うみたいだな。そうしてくれないわね。きみはさ、先生は少し驚いた後、丁寧に口を閉じて戻った。 「ねえ大丈夫でしょ。世界は広いんだから、隠さなくてもきみを受け入れてくれる人はちやんといるんだよ。僕はそれには答えず、塩づけと返した。 「塩づけと言えはね、実はね、きみちやと磯の香りがするよ」

先生は結局、小麦粉の塊を噛めなかった。フラワーだからいけないと思ったんだけどなあ、と寒い洒落をかけたので笑ってしまった。彼は密かに持ち出したさくらんぼを丁寧にハンカチにくるんでいった。発芽させようつもりらしい。歩く桜前線は楽しそうだった。 「まだなんかに食べよう？」

桜前線はさくらんぼの前で立ち止まった。入口の花コナギが輝いている。パンケーキが輝いている。僕は桜前線を見上げて言った。 「トレイいっぱいのお刺身、食べたいです。たんばばなら先生も食べられるでしょ」

短歌の部 最優秀賞

俳句の部 最優秀賞

現代詩の部 最優秀賞

喋らない青年と喋れない老人

あの人と話すとき今まで考えていたことが、スルスと口から糸を引いて、自分でも信じられなかった。今まで、どうにも口の中で言葉がからまっちゃって。猫の口から出る毛玉みたいなのを、ベツベツ吐くことができなかった。会話ってキヤッポポルなんだ、なんて言われても運動音痴で会話音痴な僕には、とてもハードルが高い話。ボールすら怖しい、つき指しそうで怖しい、下手したら自分の手からスカッとボールはすり抜けて、頭にデンッて自分からさ。別に話をしてる相手とかがじやないんだけどさ、言葉を出さずとすると、喉の奥にボールがつまって、すうっと空気だけがもれる。多人数時は、個人の意見をそこまで求められないから良いんだけど、一対一だとどうも、やりづらい。目もまともには合わせられない。あの、ランランとした目には僕は萎縮してしまふ。人は大して僕なんかに興味なんてない、僕が自意識過剰なだけっていつてもさ。そんなの絶対的に当たらない外な意見。傍から見ると、当たっているようにみえるけどさ、残念ながら僕には当たらない。 「僕は人と話すことが苦手なんです」

答えを言えない祖父に僕は言う。祖父は元々、寡黙な方で僕は祖父と話す時だけは緊張しなかった。昔は剛腕だなんて言われて恐れられていたらしいけど、毎日送ってくるメールには必ずスタンプを付けてくれる、かわいらしいところもある。僕はまじめに、それに毎日返信している。便りのないのは良い便りだなんていうけど、僕の祖父は逆だ。祖父の喉には穴が空いている。500円玉より少し大きい穴。そこで息を吸ったり吐いたりしている。なんか色々理由があって祖父は3ヶ月程前、障害者になった。 「・・・」 返事はない。祖父は話せないから当たり前。 「ピロリン」 携帯にメッセージが入った。 「あせらず、ゆつくりと(笑)今日も安全に気をつけて、楽しくね。祖父」 「これ、あげるね」

祖父はその後、僕に自分のメガネをくれた。 そんなことは全くなくて、度なしメガネらしい。 老眼鏡かと思っただけ、伊達メガネだったのか。 70歳で伊達メガネは少し痛い。 メガネ越しに見た世界は変わらないけど、壁があるみたいだ。 メガネがくもるから、マスクを外したら、言葉がこぼれた。 点が反響点となった。 フィー 研究ができると考えている。 また、山間部の滑川地区の調査では、集落の過疎化等により、伝承はもとより、集落自体が消滅していく危機感を強く感じた。若い世代としてできることを尽くし、伝承の復活や記録に貢献していきたい。

こなかかなんだけど、それはきみなりの優しさだったんだねえ」

優しい、と僕は反駁した。 「僕がパンケーキをトレイに乗せた店員が近づいてくる。 「お待たせしました、チェリーとエディブルフラワーの——あつ」 店員が体勢を崩した。パンケーキを死守したトレイから、グラスが身を投げ出す。しかたなく僕は口を開けた。先生よりも大きく。 溢れるはずの水がみるみる僕の口に吸い込まれるのを、先生は口にこぼれていくのを、店員は少し驚いた後、丁寧に口を閉じて戻った。 「ねえ大丈夫でしょ。世界は広いんだから、隠さなくてもきみを受け入れてくれる人はちやんといるんだよ。僕はそれには答えず、塩づけと返した。 「塩づけと言えはね、実はね、きみちやと磯の香りがするよ」

先生は結局、小麦粉の塊を噛めなかった。フラワーだからいけないと思ったんだけどなあ、と寒い洒落をかけたので笑ってしまった。彼は密かに持ち出したさくらんぼを丁寧にハンカチにくるんでいった。発芽させようつもりらしい。歩く桜前線は楽しそうだった。 「まだなんかに食べよう？」

桜前線はさくらんぼの前で立ち止まった。入口の花コナギが輝いている。パンケーキが輝いている。僕は桜前線を見上げて言った。 「トレイいっぱいのお刺身、食べたいです。たんばばなら先生も食べられるでしょ」

短歌の部 最優秀賞

俳句の部 最優秀賞

現代詩の部 最優秀賞

喋らない青年と喋れない老人

あの人と話すとき今まで考えていたことが、スルスと口から糸を引いて、自分でも信じられなかった。今まで、どうにも口の中で言葉がからまっちゃって。猫の口から出る毛玉みたいなのを、ベツベツ吐くことができなかった。会話ってキヤッポポルなんだ、なんて言われても運動音痴で会話音痴な僕には、とてもハードルが高い話。ボールすら怖しい、つき指しそうで怖しい、下手したら自分の手からスカッとボールはすり抜けて、頭にデンッて自分からさ。別に話をしてる相手とかがじやないんだけどさ、言葉を出さずとすると、喉の奥にボールがつまって、すうっと空気だけがもれる。多人数時は、個人の意見をそこまで求められないから良いんだけど、一対一だとどうも、やりづらい。目もまともには合わせられない。あの、ランランとした目には僕は萎縮してしまふ。人は大して僕なんかに興味なんてない、僕が自意識過剰なだけっていつてもさ。そんなの絶対的に当たらない外な意見。傍から見ると、当たっているようにみえるけどさ、残念ながら僕には当たらない。 「僕は人と話すことが苦手なんです」

答えを言えない祖父に僕は言う。祖父は元々、寡黙な方で僕は祖父と話す時だけは緊張しなかった。昔は剛腕だなんて言われて恐れられていたらしいけど、毎日送ってくるメールには必ずスタンプを付けてくれる、かわいらしいところもある。僕はまじめに、それに毎日返信している。便りのないのは良い便りだなんていうけど、僕の祖父は逆だ。祖父の喉には穴が空いている。500円玉より少し大きい穴。そこで息を吸ったり吐いたりしている。なんか色々理由があって祖父は3ヶ月程前、障害者になった。 「・・・」 返事はない。祖父は話せないから当たり前。 「ピロリン」 携帯にメッセージが入った。 「あせらず、ゆつくりと(笑)今日も安全に気をつけて、楽しくね。祖父」 「これ、あげるね」

祖父はその後、僕に自分のメガネをくれた。 そんなことは全くなくて、度なしメガネらしい。 老眼鏡かと思っただけ、伊達メガネだったのか。 70歳で伊達メガネは少し痛い。 メガネ越しに見た世界は変わらないけど、壁があるみたいだ。 メガネがくもるから、マスクを外したら、言葉がこぼれた。 点が反響点となった。 フィー 研究ができると考えている。 また、山間部の滑川地区の調査では、集落の過疎化等により、伝承はもとより、集落自体が消滅していく危機感を強く感じた。若い世代としてできることを尽くし、伝承の復活や記録に貢献していきたい。

K:DNA ―― 創立143年を迎えた国学院大学の**遺伝子**…個人・個性を尊重する校風 若いエネルギーが未来を変える

現役医師として人のために何ができるか。 その答えを求めて 富田理乃さん(史3)

言葉の一つ一つに、「学ぶこと」に対する喜びがあふれる。富田さんは、医師を続けながら国学院大学で学んでいる。医学知識と人文学的な感性のバランスが釣り合ってくることで、仕事のみならず、人生を楽しめるようになったと語る。

幼い頃から人の役に立てる仕事がしたいと願い、高知大学医学部に進んだ富田さん。深夜まで研究に没頭し、使命感に燃えていた。ところが、研修医として現場に出てみると、患者を思う気持ちと医療制度などの“社会の現実”との板挟みになり、無力感にさいなまれたという。「人の生き死にに直面することは厳しいです。患者さんの前で泣いてしまったこともあります。ドライに対応する自分を許せず、医者に向いていないと思い、落ち込みました」

精神的にギリギリだった日々。仕事に対する不安でいっぱいだったが、自身の思いに近い故事成語や四字熟語を漢検のテキストの中にいくつか見つけ、言葉として客観的に捉えられたことで気持ちが楽になったという。この経験の他にもう一つ、国学院大学で学び直す後押しになったのは、外科の教授が言った「医者に必要なものはアートだ」の言葉。アートとは何を意味しているのか、その答えを探す時間が文学部での学びである。「日本美術史で触れる時代ごとの死生観、浮世絵に描かれた人々の何気ない営み、英文学を精読して気付いた表現の裏に隠れた世界……。気持ちが豊かになり、暮らしの楽しみ方

が変わりました。文化人類学や倫理学の授業では、実体験や仕事と関連づけて毎回考えさせられます。全ての学びが、私の人間性や人生観に結び付いていますね」

文学部で学んだことで、医師として命に向き合い、本当の意味で患者に寄り添うために必要な部分が補強された実感があるという。また、医療現場で人生の終わりについて踏み込んで話をしなければならない時に苦しさを感じていたが、死生観を見つめ直したことで、自身を支える武器のようなものを得たそうだ。「医学の知識だけでは立ち行かなくなっていた私にとって、人文学的な学びには不足していた何かが満たされるような思いでした。理系学問が提供する新しい知識や技術を、人類の幸福のためにどう使うべきかを考えるのが文系学問です。それは自転車の両輪のようなもので、医者として人文学系の学問を学ぶことには意味と目的があると感じています」

文学部で学んで3年。医師に求められるアートとは、「データや数字では表せない、人がコミュニケーションを図る上で必要なもののことを意味しているのではないか」と考えるようになったという。医



師としての責任感と、人の幸福を願う感性の両立。そこに新型コロナの経験も重なり、公衆衛生がテーマになった。卒業論文は明治時代の麻疹の感染症対策を研究。卒業後は医学部併設の大学院で研究を続けたいそうだ。一方で、医学教育の一環として、勉強につまずいてしまった学生たちに講義を続けている。医療か、教育の道か。今はまだ決めずに学び続ける。どちらに進むにせよ、富田さんなら、出会う患者や学生に安心感や信頼感を感じてもらえる人となることだろう。

宮崎・船引神楽の未来を背負い、 自ら信じる道をひた走る 岡新之介さん(神文3)

岡さんは、3歳で神楽と出会ってから今日まで、ただひたすら神楽のために研さんを積み、挑戦を重ね、積極的に発信を続けてきた。多彩な活動を語る言葉には微塵のてらいもなく、神楽への純粋な思いがあふれる。

宮崎の船引神楽を継承すべく、精力的に活動が続けている岡さん。社家でも代々神楽を伝える家系でもないが、3歳の時に見た宮崎空港のからくり時計「夢かぐら」をきっかけに各地の神楽を見て回るようになり、6歳で船引神社の神楽と出会い入門。江戸時代中期から口伝で伝承されてきた船引神楽は、迫力のある舞で知られている。「現在、船引神楽保存会には約20人の舞手がありますが、半分は50歳以上。後継者問題は深刻です。『鬼滅の刃』の影響で神楽をやってみたいという子どもが増えていて、守るべき型を分かりやすい表現で教えるように工夫しています」

先人たちによって伝えられてきた意味を通しての動きを守るため、古い映像などを検証し、昔の神楽に戻す取り組みや正しい所作の体得にも努める。笛や太鼓の稽古にも力を注ぐ。それも担い手としての責任を自覚しているが故だ。引っ込み思案な少年だったというが、成長とともに、神楽を背負っていくためには人前で話すことは避けては通れないと覚悟を決めて克服してきた。今は船引神楽を代表する存在として、普段の行動から気を付けていると語る。

正式な奉納の他、歌手のサラ・オレインさんとのコラボレーション、船引神楽の台湾公演、宮崎の民俗芸能や文化を広める“みやざき応援隊”など、多彩

な活動に取り組み、SNSでの発信も積極的に行っている。一般の人々に神楽の魅力を伝えるためには、新しいことに挑戦しなければと考えてのことだ。しかし、注目されている存在だけに批判にもさらされる。「神楽は神様に奉納するのが本質で見せ物ではない、という意見があります。けれど、お客さんが見て喜ぶことを、神様もきっと喜んでくれると思うんです。神楽を途絶えさせないために私にしかできないことがある、という信念と使命感で活動しています」

意見の対立には、宮崎の神楽が神道と民俗の二面性を持っていることが背景にあるのだそうだ。神事が民俗芸能かという視点の違い、研究者が神楽を舞う担い手かという立場の違いによっても考えは異なる。神道文化学部で学ぶ岡さんは、どちらの思いも分かるからこそ悩みは深まるのだが、いつの日か、多様な意見や価値観が自分の中で一つに融合することを願っていると語る。

現在は、藤本頼生・神道文化学部教授のゼミで神道と現代社会の新しい関わり方を多角的に学び、「神楽の歴史と継承―社会福祉の視点から―」をテーマに研究をしている。

「私が小学生の頃、船引神楽は老人ホームなどで慰問を行っていました。近い将来、復活できればと思



います。神楽には、人を幸せに、心豊かにする力がある。福祉や医療への貢献も研究していきたいと思っています」

今後は4年次に神職資格である「明階」の階位を取得する予定だが、どのように神楽の継承と奉職を両立させるか、答えはまだ出ていない。答えまでの遠さが、可能性の大きさを示している。揺るがぬ思いとともに進めば、いずれおのずと道が見えるに違いない。

両インタビューの詳細は「国学院大学メディア」で公開予定